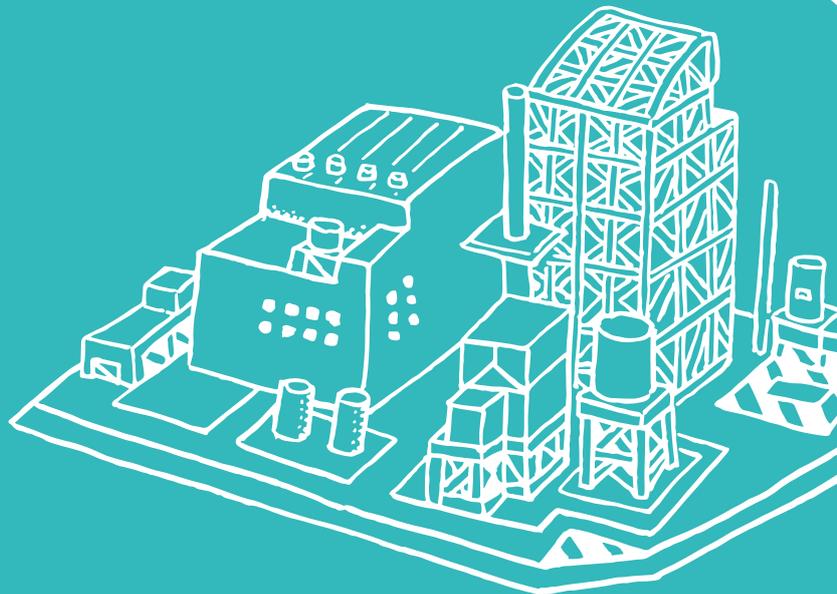




建	実録
設	若
史	築



1890

1890年当時の若松港

現在

現在の若松港

Power to Combine Forces

民間の力を合わせて、港をつくり、

産業を発展させ、都市を築く。

若松港——かつて日本最大の石炭積出港として、日本の近代化に大きく貢献した港です。

この若松港の築港を目的に設立されたのが若松築港会社。現在の若築建設の前身です。

島国・日本において港づくりとは、国づくりの重要な事業です。

そのため、明治以降、ほとんどの港は国や自治体により整備・運営されてきました。

その中で、若松港は若松築港会社が民間資本を募って整備した希有な港なのです。

完成した若松港は九州の産業発展に大いに貢献。

その実績を礎に若築建設は総合建設業としての力を蓄え、海洋土木の枠を越えて、

陸上土木や建築でも事業を展開。海外を含め、幅広いインフラづくり、都市づくりに貢献しています。

港づくりから始まった若築建設 130 年の歴史は、日本という国家の発展とともにあるのです。

ワークフロー

営業・プランニング



「どうやってものをつくるか」という建設計画から始まります。公共団体や民間のお客さまと深く関わりながらプランを構築します。

技術系 事務系

設計・技術提案



「どういうカタチのものをつくるか」という設計をします。意匠・構造設計部門が関わり、特殊な工事などは新しい技術の導入を検討します。

技術系

施工管理



実際にカタチにしてい「施工」というフェーズにはいります。工事計画を立て、専門の工事会社や材料手配など、工事全体を管理します。

技術系

全体支援



本社・支店の事務部門をはじめ、法務、経理、総務など事業全体に関わる会社の方針・運用をチェック・サポートします。

技術系 事務系

Work 事業紹介

海洋土木

“マリコン”として確かな存在感を発揮する若築建設。海洋土木は、当社の出発点にして現在も核の一つとなる重要な事業です。2019年には、当社が建設した石積護岸などを含む「若松港築港関連施設群」が土木学会選奨土木遺産に認定されるなど、130年にわたる歩みは社会的にも高く評価されています。近年では海上空

港、港湾施設、護岸整備、防波堤などを手がけています。海底の土砂を取り去る浚渫工事など、海洋土木では外から見ることでできない特殊な工事も多くあります。周囲を海に囲まれた日本にとって海洋土木はなくてはならない重要な事業であり、若築建設は独自の技術開発も含めて、社会に大きな貢献を続けているのです。

2010



羽田空港D滑走路

新滑走路の基本施設として、2,500 mの滑走路と誘導路、進入灯橋梁、保安・付帯施設の設計および施工を行った。また、既存の空港と新設滑走路を結ぶ連絡誘導路を整備した。

2018



宇部港本港地区航路 (-13m) 浚渫

起工測量から施工管理の記録および関係書類について3次元データを活用するICT活用のグラブ浚渫工事で、自社保有船である「若鷲丸」を使用した。

陸上土木

高速道路や橋梁、トンネル、鉄道など、社会のインフラ整備に不可欠なのが陸上土木です。若築建設では海洋土木で培った実績をベースに早くから陸上土木事業にも進出。官・民を問わず、幅広い案件を手がける総合建設業としての一翼を担っています。地域のランドマークとなるような、スケールの大きいダイナミックな構造物

も多数手がけています。現在では再生可能エネルギー分野での関連工事や、東南アジアを中心とした海外事業にも積極的に取り組んでいます。また、人口減少に伴う労働力不足という構造的な問題にも真正面から取り組み、ICTやAIといった先端技術も積極的に導入。現場での生産性向上という課題に挑んでいます。

2013



東九州自動車道 清武ジャンクション

宮崎市から日南市へ南進する本線の新設と清武ジャンクションへのランプの増設・改築を行った。

2018



九州新幹線 嬉野温泉駅高架橋

武雄温泉駅～長崎駅を走行する西九州新幹線の高架橋で、橋梁518m、高架橋535m、駅部高架橋195m、深礎4基、保守用斜路2カ所の延長1,248mを施工。

建築

総合建設業である若築建設は、建築事業においても長年にわたって大きな実績を上げてきました。これまで学校施設、行政関連施設、商業ビル、マンション、オフィスビル、工場、倉庫・物流施設など幅広い領域の建築物を手がけています。近年では特に首都圏エリアでの案件拡大に注力。高いポテンシャルを持つ市場での多様な建築

ニーズに対応する体制を整えています。また、法人顧客・民間需要への対応強化に取り組み、不動産を活用した企画営業など、積極的な“攻め”の姿勢をとっています。社会の財産である建築物は、人々にとって身近な存在です。若築建設では海洋土木・陸上土木で培った実績を背景に、建築事業でもさらなる成長を目指しています。

2016



九州女子大学

敷地面積 103,115.99㎡、鉄筋コンクリート造4階建ての研究室をメインとしたA棟、実験室をメインとしたB棟、大講堂をメインとしたC棟の計3棟の学校施設を新設。

2019



センターマークス複合施設

福岡県東区のアイランドシティに位置する賃貸マンション、シニアマンション、商業施設、コミュニティセンターで構成される複合施設を建築した。

施工実績

海から都市へ。

洞海湾から世界へ。



海洋

2019

**平良港
-10m岸壁築造**
沖縄県

「平良港国際クルーズ拠点整備事業」の対象として、14万t級クルーズ船が接岸可能な岸壁を築造した。



海洋

2018

**小名浜
マリブリッジ**
福島県

福島県小名浜港の臨港道路で、「土木学会田中賞 作品部門」を受賞した。夕方にはライトを灯し、小名浜港の新しいランドマークになっている。



海洋

2019

**昭和四日市
震災対応棧橋**
三重県

石油供給インフラ強化事業の一環として、南海トラフ巨大地震に対応可能な耐震強化供給施設を新設した。

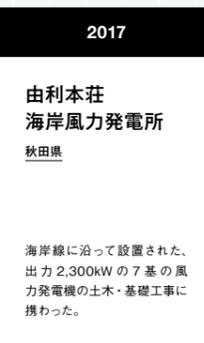


海洋

2019

**南本牧
コンテナヤード
整備**
神奈川県

横浜港南本牧ふ頭の国内最大級MC-4岸壁(耐震)後背地のコンテナヤードの土工、舗装工、排水溝構築物、配電線設備工および仮設工を施工した。



2017

陸上

**由利本荘
海岸風力発電所**
秋田県

海岸線に沿って設置された、出力2,300kWの7基の風力発電機の土木・基礎工事に携わった。



2019

陸上

**黒川太陽光
発電所**
宮城県

宮城県黒川郡の山林を活用した大規模な太陽光発電施設であり、切盛土工は700,000㎡を超える。



2017

陸上

**四日市
いなばポートライン**
三重県

国内でも前例が少ない後ラーメン工法を採用した臨港道路で、この臨港道路の整備により、生活・産業を支える四日市港の更なる発展が期待されている。



2016

陸上

**学研北部
宅地整備**
福岡県

北九州市の教育・学術機関と住宅地を集積する約5.8haの土地を整備する事業で、住宅用地17街区166区画の区画整理と道路整備に合わせて、下水道の布設を行った。



建築

2019

**みやこ犀川
小学校**
福岡県

吹き抜けの多目的ホールや廊下と教室がオープンスペースとなる可動間仕切り、投影式可動黒板などの近代的な設備を有し、木材を多く使用した地域と調和する教育施設を建築した。



建築

2016

**佐伯バイオマス
発電所**
大分県

セメント工場の跡地内の約2万㎡を利用してPKSを主要燃料とするバイオマス発電所を建設した。国内トップクラスの定格出力5万kWの発電量を誇る。



建築

2017

**横浜市金沢区瀬戸
2丁目マンション**
神奈川県

鉄筋コンクリート造10階建て分譲マンションで、総戸数が72戸、テナントが2店舗あり、海が眼前に広がるロケーションを活かした計画となっている。



建築

2016

**東北自動車道
岩槻IC管理施設**
埼玉県

建築工事・電気設備工事に担当し、首都直下地震を想定した耐震構造と高機能な機械設備を備えた高速自動車道の管理施設を建設した。



2018

海外

**アピア港
安全向上計画**
サモア独立国

サモア独立国にて延長137mの岸壁新設やコンテナヤードの新設(1,970㎡)や補修(補修部分約1,100㎡、棧橋スラブ部分約5,400㎡)に従事した。



2012

海外

**ジャフナ教育病院
中央機能改善計画
工事**
スリランカ
民主社会主義共和国

スリランカ国ジャフナ市に中央医療設備機能を備えた病院施設を建設した。医療従事者の養成施設としての機能も兼ね備える。



2014

海外

**マンムナイ橋梁
建設計画工事**
スリランカ
民主社会主義共和国

スリランカ国に架かるプレテンション方式のPC径間単純床版橋を建設した。



2017

海外

**国道網
主要橋梁建設事業
-パッケージ1**
スリランカ
民主社会主義共和国

スリランカ国の国道主要橋梁事業として10橋を建設した。写真の橋梁はPCポストテンション桁の橋梁で、幅21.2m、長さが700mとなる。



見えない海底で、

ダイナミックな先端技術を繰り返し広げる

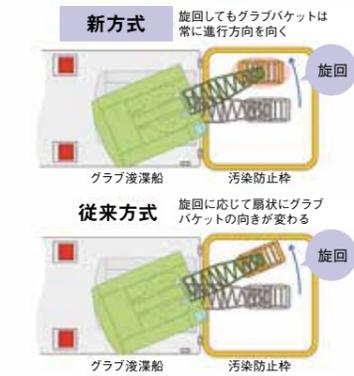


グラブ浚渫船 若鷲丸

Wakawashi-maru



土砂を掴むグラブバケットは、重さが60tあり、一度に30m³(お風呂150杯分)の土砂をつかむことができます。



平行なグラブバケットで、掘り過ぎることを抑えるとともに、作業効率を向上させます。

Daihachi-Taikigo



フローティングドック 第八大亀号



船体が沈む



船体が沈むことによって、ケーソンが浮かびます。浮上したケーソンを引き出した後、フローティングドックは自力で浮上します。

若鷲丸は、船が港で安全に航行、停泊できるよう航路や停泊地の海底に堆積した土砂を取り除いたり、さらに深く掘り下げる「浚渫」という作業を行うグラブ浚渫船です。大きなクレーンと、その先には土砂をつかむための大きなバケツ、グラブバケットが付いています。グラブバケットを水中に沈めて、海底の土砂をつかみ取ります。最大で深さ60mまでの浚渫が可能で、110tの重さまで吊り上げ

ることができます。「環境に配慮」「浚渫作業の効率化」「機動力」「安全・保守」の4つのコンセプトをもとに建造しました。「IMO(国際海事機関)認証の原動機」やハイブリッドシステムを導入し、環境にも配慮しています。モーターアシストにより、クレーンの巻き上げ速度が従来に比べて18%UP、燃費も26%向上しています。

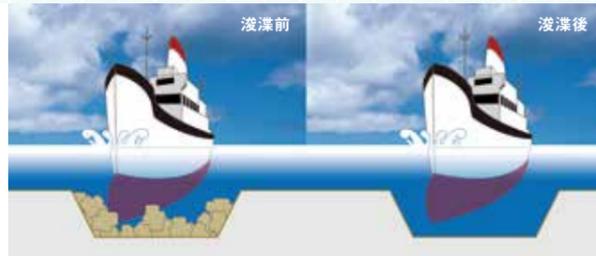
第八大亀号は、防波堤の本体となる「ケーソン」を製作するための作業台船です。フローティングドックとも呼ばれています。製作するケーソンの高さは約15mになるものもあり、4階建のビルに相当します。海上にビルを建設するようなものです。箱型の巨大な鉄筋コンクリート製のケーソンを、陸上で製作するスペースを確保するのは難しいため、海上の作業台船として活躍します。

ケーソン完成後は船の内部(バラストタンク)に注水を行うことで船体を水中に沈ませ、ケーソンを進水させることができます。全長54.00m、全幅38.50m、全深さが19.50mあり、最大積重量は6,000tです。巨大な構造物を海に浮かせて移動する、海洋土木のダイナミックな作業を可能にする作業台船です。

航路浚渫

大型船航行に必要な水深を確保するため、海底を掘る。

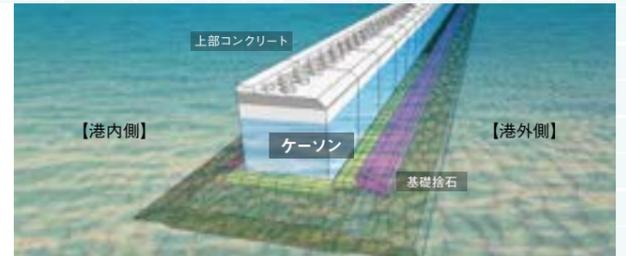
大型船を受け入れる港は、海底を掘って水深を深くしておく必要があります。港には土砂が流れ込んでくるため、定期的にこの土砂を取り除く作業が必要です。この、土砂を取り除き海底を掘り下げることを浚渫と呼びます。浚渫は港を守り、船を安全に航行させるために大切な作業です。



ケーソン工法

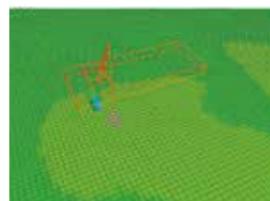
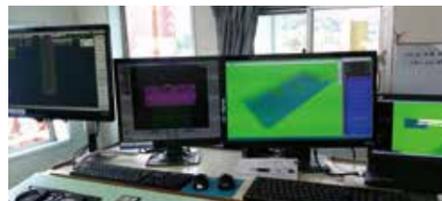
大きな波を遮るため、コンクリート製の壁をつくる。

ケーソンとは、フランス語で「箱」を意味します。港の防波堤などをつくるためのコンクリート製の箱型構造物です。波や潮の条件が厳しい場合や海底の支持層が比較的浅い場合に用いられる工法です。防波堤をはじめ橋梁の基礎や連続に設置して海底トンネルを構築することもあります。



ICT施工

海の中は見えない。だから海洋土木作業にはICT施工が不可欠。作業船操作室はICT機器で埋め尽くされている。



浚渫施工管理システム

グラブ浚渫船およびバケットは、地形の視認性を阻害しないワイヤフレームで表示されます。位置、深度、グラブバケットの状態を3次元でモニタリングできるので、作業状況を直感的に把握しやすくなります。



ケーソン無人化据付施工支援システム

ケーソン据付時に面上を無人化し、位置誘導、傾斜管理、注排水管理を行うシステムです。新設面上に作業員を配置することなく、1カ所の遠隔操作室で集中的に施工状況管理、機械操作を行うので、安全性向上、据付精度向上に寄与します。



吊荷回転制御装置

クレーンによる吊り作業において、吊荷の回転を遠隔操作で制御する装置です。ジャイロスコープの原理を利用しています。潜水士の直接作業を軽減することができ、水中構造物の据付作業における安全性、施工効率の向上に大きく寄与します。

Human Resource Development

人材育成

少数精鋭の環境のもと、
まっすぐ育つための
確かな道しるべがあります。

森下 準 東京本社 人事部 人事課長



私自身の経験を振り返って感じるのが、若築建設は人の育成に関して、いい意味で“お節介”な会社であるということです。少数精鋭であることをアドバンテージに、先輩が若手一人ひとりに対して親密に関わり、丁寧に育てようとしているのです。

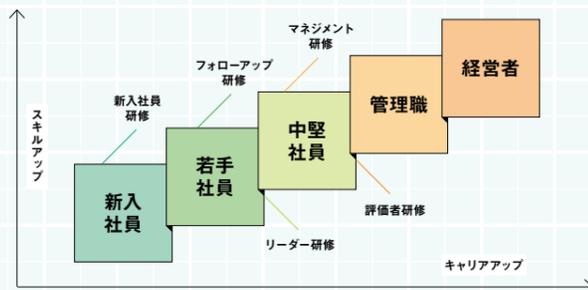
建設業というのは、まったく同じ条件や環境の工事というのは、一つもありません。一方で一つの工事に対して安全・品質・工程・環境・予算など、多様な管理を行う必要があります。そのため先輩から後輩へと経験や知識を受け継いでいくことが重要です。“お節介”であるということは、この点で極めて重要なポイントだといえるでしょう。従って現場での体験を通じて学んでいくOJTは、非常に重要な人材育成の場と位置づけられます。新人のうちは誰でもミスをするものですが、失敗に学び、共有する風土があるため、常に未来に向けて顔を上げて学んでいくことができるのです。そして、OJTと同様に重要なのが、現場を離れての教育研修の仕組みです。

当社では、わかちく社員教育プロジェクト「はぐくみ」を制定。階層別・職種別のマトリクスで、会社が期待するキャリアパスと必要なスキルを明確にし、遠回りせずに育っていくための“道しるべ”としました。これによって明確な目標のもとで日々の業務に従事し、成長しながらキャリアを築いていくことができるでしょう。

さらに当社では資格取得を力強くバックアップ。特に一級土木施工管理技士資格支援プログラムを用意し、合格率を大幅にアップさせています。個人の意欲を尊重しつつ、的確な指導を行うことで、資格取得を通じた育成へと結びつけています。

若手のうちは、壁にぶつかって悩むこともあるでしょう。しかし、目標があるからこそ、悩みも生まれるのです。一つひとつ壁を越えながらものづくりに真摯に取り組み、成長していきたいと感じた方は若築建設の門をたたいてください。

キャリアパス



階層別研修

研修名	時期	目的
新入社員研修	入社時	社会人としての自覚、規律の習得 会社と仕事の理解、連帯意識の醸成
フォローアップ研修	半年経過時	短期成長目標の設定 コミュニケーション力の向上
リーダー研修	約6年経過時	チームリーダーとしてのスキル習得 会社からの期待、あるべき自身の姿の明確化
マネジメント研修	約12年経過時	マネジメントの原理原則の体系的理解
評価者研修	管理職就任時	評価マネジメントの基本理解 実践ポイントの習得

主な教育制度

就学支援制度

高卒及び高専卒の社員を対象に、就学支援制度を設けています。就学方法は業務に従事しながらの通信教育とし、その学費を会社が負担しています。

土木施工管理技士 資格取得支援プログラム

土木技術者のスキル向上のためeラーニングなどのオンライン講義と受験生の定着状況を確認する勉強会や講義を行い、受験生をサポートしています。

一級建築士 合格支援

一級建築士の資格取得に要する費用(資格支援予備校など)を500万円まで無利息で貸付け、条件を満たせば返済を全額免除しています。

新人研修

若築建設には、職場に配属される前に同期が一堂に会して行われる新人研修があります。ここでは、若築建設の理念や各種制度を理解すると共に、社会人としての自覚、規律の習得、会社と仕事の理解、連帯意識の醸成をすることが目的です。また、同期の絆を強くしていくという側面も持った重要な研修です。



技術士 資格取得支援プログラム

社外及び社内の技術士が協同し、受験申込書や論文の作成ロジックの理解を深め、論文添削などを通じて受験生の資質向上を図っています。

英会話教育

海外企業との対話(交渉、協議)が業務上必要とされる者及び海外勤務予定者・志望者を対象として、英会話教育を行っています。

資格取得奨励金

「技術士」、「建築士」、「コンクリート診断士」など、様々な種類の資格取得時に、資格取得奨励金を支給しています。

女性技術者現場見学会

これまで建設業にはあまり女性技術者がいませんでしたが、当社では女性の活躍を応援するため、女性技術者現場見学会を行っています。女性同士の横の繋がりを作ることで相談しやすい関係性を築くほか、女性ならではの意見や提案を期待しています。実際に女性目線から見た作業服の改善なども実現しました。今後も女性が働きやすい建設業者を目指し、更なる改善・改革を続けていきます。



Welfare 福利厚生

独身寮・借上社宅

社員の生活面のサポートとして、独身寮や借上社宅制度があります。独身寮では、会社が用意した家具・家電付きの物件に入居可能です。初期費用や水道光熱費は全額会社負担で、寮費は月額1万円です。借上社宅は家族持ち社員のための制度で、個人が決めた物件を会社が契約することで、敷金・礼金・仲介手数料の全額と毎月の家賃の一部を会社が負担します。

若手社員のための帰省旅費

全国規模で事業を展開する若築建設では、入社5年目までの若手社員を対象に帰省旅費のサポート制度も整えています。実家に帰省する旅費を年間最大2回支給します。

くるみん認定企業

若築建設は「次世代育成支援対策推進法」に基づき、育児支援制度の充実を通して社員の育児と仕事の両立支援に取り組み、「子育てサポート企業」として厚生労働大臣の認定(くるみん認定)を受けています。



クラブ活動

部署を超えた社員の交流や健康増進を目的に、若築建設では社員が自発的にクラブ活動を行っています。テニスやフットサル・登山など、様々なクラブ活動があります。会社から補助金を支給しサポートを行っています。



若築建設のDNA

130年の歴史で築き上げた社風を 社員の体験メッセージでご紹介します。

若手から中堅社員に若築建設らしいエピソードをテーマにアンケートを実施しました。皆さんに伝えたい「ものづくり」や「人づくり」の特徴や社風がわかる体験談を一部抜粋してご紹介します。

内外一致 同心協力



内外一致 同心協力とは

初代社長・石野寛平が若松港築港を振り返り「若松築港沿革記」で記した言葉です。官と民、地域と地域、それぞれの人々が同じ目的に向かって、「同心協力」心を一つにして力を出し合う。これこそがまさに建設産業の基本である。という若築建設の企業理念です。



建築職

31歳

土木・建築合同で設計した工場の物件の竣工・引き渡しを無事に終え、施工から満足してもらえたことは、内外一致、同心協力の精神を感じました。



土木職

27歳

施主の方と意見を重ねて、協力業者の方とも意見を交わして、一つのを毎回つくっています。端から見ると、足を引っ張り合っているようだけど、その人の立場で考えると、よりベターを目指していたと、工事が終わってから思ったりすることがありますよ。



土木職

31歳

東日本大震災の復旧工事では、施工者である当社と、発注者である国が相互に相談し合って施工を進めました。特に現場を実際に見ながらの打ち合わせが多く、官民一体となって、「早期復旧」という目標に向かい、議論を重ねました。

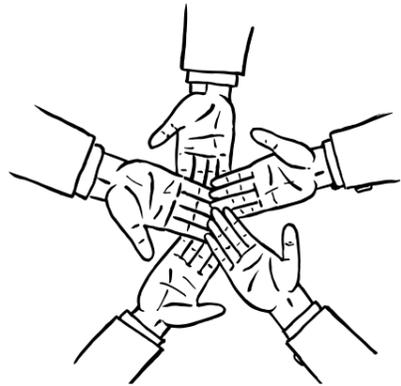


土木職

29歳

何か問題が発生した場合、様々な観点から対策を検討する必要があります。設計的な問題や現場環境などの施工上の問題、資材調達の問題を考慮した上で団結し解決しました。

力を 合わせる力



力を合わせる力とは

このパンフレットのコンセプトとして、皆さんに若築建設の特徴を伝えるためにつくったキャッチコピーです。一人ひとり小さな力でも、周りを巻き込み大きな力にすることで、社会に大きな影響を与えるようなものづくりができる。この言葉に共感する社員の声を紹介します。



建築職

32歳

工事によっては毎日百人以上の作業員が現場に集まり、日々作業を進めています。最終的には千・万単位の間人が工事に関わっていたのだと、現場が終了して事務所を閉めるときに理解しました。



建築職

30歳

建築物を施工する中で、多様な職種や経験を持つ人が切磋琢磨して仕事に打ち込む。時には真剣さから衝突したりいがみ合う場面があったとしても、職員と職人が力を合わせることで竣工までたどり着くことができました。



事務職

27歳

決算は財務部だけではなく支店、部署の垣根を越えて行う業務が多々あるため、自分の業務だけを考えて進めてしまうといきません。決算期は忙しく、大変なこともあります。組織で力を合わせ、乗り越えたときの達成感は大いです。



土木職

29歳

現場でトラブルがあった際に、支店土木部および設計部が丸となって、問題を解決できるように施工方法を考えました。限られた工期の中、(残業や休日での作業も必要にはなりませんが)協力業者さんとも力を合わせて工事を完成させることができました。

少数精鋭



少数精鋭とは

日本全国から海外まで工事を展開する若築建設ですが、社員数は大手ゼネコンほど多くありません。社員全員の顔が分かってコミュニケーションをとることができるので、社員一人ひとりの発言力が大きくなります。若手から仕事を任せられ、成長できる環境があります。



建築職

26歳

少数だからこそ、若いうちから色々なことを経験できます。また、自分の意見が影響して、一部の書類が電子化されるなど、制度が変わることもあります。学歴ではなく、働きを見て期待と評価をしてもらえたことも印象的でした。



事務職

23歳

支店内で決めかねる案件において、本社担当者の助言で事態が解決したときに、さすがだと感じます。また、各支店内で数の少ない実務者(30〜20代)の仕事への取り組み方は、一緒に働き、育ててもらっている中で、尊敬しています。



土木職

30歳

複数の企業で協力して工事を行うJV作業所に所属していた際、現場の状況把握がただでさえ難しい中、現場に対する知見が深い先輩の指示は的確で、協力業者からも非常に信頼されていました。



土木職

25歳

入社2年目で現場代理人をさせてもらいました。初めは右も左も分かりませんでした。上司や先輩のサポートもあり、無事に工事を終えることができました。これを機に、施工管理という仕事をしていく上での視野が広がりました。

経理・総務

文系出身の自分に建設会社で何が出来るだろうか。入社前はそんな不安でいっぱいでした。けれど今は胸を張って言えます。現場の仲間たちが存分に力を発揮するために、縁の下の力持ちとして支えることが自分の使命だと。

東北支店の管理部で、私は主に経理と総務を担当しています。経理業務では東北6県の現場の請求書のチェックや支店で保有する固定資産の管理、支払い調書や外形標準課税資料の集計・作成などを行います。総務業務は幅広く、賃貸借契約の管理や、時には地鎮祭や竣工式の司会なども担います。いずれも迅速性と正確性が要求される仕事です。だからこそ、言われたとおりに淡々と仕事をこなす「便利屋」ではなくて、一つひとつの仕事の意味を考えながら、求められている仕事の一步先を行く、事務のプロ、で

現場の仲間を支える。事務のプロとして、



PROFILE

岡村 侑樹

2016年入社 表現学部表現文化学科卒

巨大建築物を支える基礎工事への思い

福島県風力発電の現場が忘れられません。海岸線にそびえる巨大な風車。実はダイナミックで人目を引きましたが、それを支えているのは当社の手がけた基礎工事。目立たないけれど、本当に凄いの「縁の下の力持ち」としての基礎だと実感しました。その姿に私は、事務の担当者としての自分の姿を重ねています。



ありたいと考えています。私に若築建設を勧めたのは父でした。父も若い頃、若築建設に入社したと聞いていたようです。そんな父の思いを胸に自分を磨き、いつかは本社会社全体を俯瞰する仕事に携わりたいと考えています。

施工管理

重いものを持つときにちよつと苦勞するけれど、それ以外で女性だからとハンディを感じたことはありません。私が目標にしている先輩も女性の施工管理技術者。私も早く彼女のように、現場でみんなから頼りにされる存在になりたいと思っています。少数精鋭の当社では、若い人材に責任ある仕事を任せる方針です。当然、現場の職人さんは私より経験も知識も豊富な方ばかり。皆さん優しく、私が質問しやすい雰囲気をつくってくれています。これも、私たち若い人材を育成しようという若築建設の社風を感じます。

印象に残っているのは、施主や設計監理者立ち会いの検査に初めて同行したこと。施主の意見を受け、この建物には人が住むのだから、徹底した管理を行わなければならない、という思いを強くしました。

若い人材の育成に本気で取り組んでくれます。



PROFILE

小山 遥香

2017年入社 デザイン学部建築学科卒

地元・九州への大きな貢献を実感

九州で生まれ育った私ですが、実は若築建設の名前は、就職活動を始めるまで知りませんでした。今では「あれも、これも若築建設だったの!」と驚くことばかり。九州新幹線をはじめ、北九州市の複合文化施設やトンネル、私の母校も、若築建設の仕事でした。九州出身者としては、こんなにも地元へ不可欠な存在だったということで、嬉しくなります。



その後、竣工したときはホッとすると同時に、大きな達成感を味わいました。「わかちく」という印象的な言葉の響きがかきつけて知った当社。一人ひとりを大切に育ててくれる恵まれた環境の中、私も伸び伸びと育っていききたいと思っています。

営業

スケールの大きなものづくりに携わりたいと思って選んだこの仕事。官公庁、民間それぞれの幅広い案件に携われることが魅力です。

「官」の仕事では中央官庁や都庁の案件が多く、自衛隊庁舎の建設も受注しました。入札に必要な書類なども自分で作成するのですが、記入ミスは許されないという緊張感があります。一方の「民」の仕事では、カーディーラーの店舗建設、大型商業施設の改修の工事を受注しました。いずれも施工はこれからのので、竣工が楽しみです。

営業の仕事で大切なのはお客さまとの信頼関係に尽きます。特に、「民」の場合、足繁く足を運んで私という人間を信頼していただくことが不可欠です。重要なことは、自分を飾ることなく、「素」を見ていただくこと。その結果生まれる人間対

人間関係づくりこそ、営業としての原点。



PROFILE

原島 優弥

2017年入社 経済学部経済学科卒

さまざまな立場の仲間と力を合わせて

風通しの良い社風が、入社決め手となりました。今もその印象が変わりはなく、部署の違いや年齢の違いを超えて、さまざまな社員と力を合わせて仕事をしています。会社を代表してお客さまと接するのは営業である私ですが、私の後ろには建築部、積算部、設計部などの仲間がいるので、とても心強く感じています。



人間の関係が、営業の基本となるのです。知識や経験はその後に自然についてくるので、まずは自分という人間を磨くことを大切にしたいと思っています。そうして培った信頼関係を基本に「あなたなら任せて安心」とお客さまに言っていたいただけるような存在を目指します。

構造設計

意匠設計と違って、構造設計の仕事は人の目につかない仕事です。しかし、自分が携わった建築物が完成すると大きな達成感が得られますし、目に見えないところでこの建築物の安全性・耐久性を支えているという誇りもあります。最近では一級建築士の資格を取得したことで、書類や図面に私の名前が掲載されることが増えました。今まで以上に仕事に対して責任を感じます。

現在手がけているのは、廃棄物処理施設プラントの構造設計です。今まで担当した中で最も大きな規模の建築物で、なおかつ焼却炉などの特殊な設備にも配慮した設計が求められます。社会にとって不可欠の建築物ですから、大きな使命感をもって取り組んでいます。

将来のビジョンは、自分ひとりで構造設計業務を遂行できるようにすることで

目に見えない力の流れを創造する仕事。



PROFILE

下前 孟

2014年入社 工学部建築工学科卒

若手のうちから責任ある仕事を任される

油槽所に建設した事務所棟の構造設計を担当したのは、入社3年目のこと。初めて最初から自分で担当した物件でした。机上だけで設計すると、「これでは実際に施工ができない」ということが起こります。その点で、私自身が入社1年目に現場の施工管理を経験したことは大きく役立ちました。現場の経験が責任ある仕事につながります。



す。その目標に向けて、今は構造設計一級建築士の資格取得のための勉強をしているところです。これまで当社が手がけてこなかったような大規模な物件の構造設計ができるよう、自分を磨いていきたいと思っています。



県庁職員から九州の産業となる港をつくり上げた
嘉永元年(1848年)～大正10年(1921年)

石野 寛平

初代社長。1848年生まれ。福岡県庁という安定した職を辞し、若松築港港のために奔走。数々の困難を乗り越え、1890年に若松築港会社を設立し、企業基盤の確立に尽力した。

内外一致 同心協力

熱い使命のもと、
自らの意志で偉業に挑む

すべての人々が心を一つに、
道を歩んだ

「若松を門司とならんで東洋貿易港たらしめんと欲している」。若築建設は、一人の男の熱い志のもとで誕生しました。その男こそ、初代社長・石野寛平です。若松を石炭の積出港として、また将来の貿易港として開港すべく、県庁職員の地位を自ら辞して、政官界に働きかけたのです。若松築港会社設立後は、経営に窮すると日本資本主義の父といわれる渋沢栄一や三菱の大番頭といわれた庄田平五郎と会談して両氏を相談役に迎えたこともありました。数々の困難を乗り越え、人を巻き込み、石野寛平は若松築港港に向かつて邁進したのでした。

1890年に設立された若松築港会社で石野寛平は、1896年まで最高責任者として企業基盤確立に取り組みました。そうした努力が実り、同社の重要性は地元だけでなく中央からも認められるようになり、ついに若松築港港の許可が出されたのです。後年、このことを振り返った石野は「内外一致同心協力せし人々の功によるもの」と述べ、官・民間問わず多くの人々が同じ目的に向かつて心を一つにしたからこそ、この事業は成功に至ったのだとしています。これぞまさに建設事業の本質であり、今も企業理念として社員一人ひとりの胸に刻まれています。



レコード会社や映画会社の社長も歴任。
大正5年(1916年)～平成11年(1999年)

有田 一壽

第7代・第9代取締役社長。1916年生まれ。教育者として歩んだ後、若松築港株式会社に入社し、1958年に取締役社長に就任。30年以上にわたり経営トップとして会社発展に尽くす。

進取の気性 自由な着想

壁を越えた幅広い活躍で
世に足跡を刻む

挑戦と変革を大切にする
企業文化を育んだ

30年以上もの長期にわたって経営トップを務めた有田一壽は、当社の発展に大きく寄与するとともに、社風や文化の礎も築きました。特筆すべきはその多彩な活躍ぶり、文化への造詣の深さから福岡放送取締役を皮切りに、日本クラウン、ユニオン映画の社長に就任しました。また、教育関係の要職を歴任するとともに、福岡県下の大学、高校の理事長も務めました。さらに参議院議員としても活動するなど、政・財・教育界をまたいで幅広く活躍しました。その他にも多くの団体での活躍を通じて幅広い人脈を築き、洞察力と指導力を発揮しました。まさに社会の要人だったのです。

1980年、有田一壽は一編の論を発表します。「国土創造論」です。ここでは海洋国家・日本が発展するためには、海洋埋め立てによって新たな国土をつくり出すというユニークな提言を行っています。こうした従来の枠組みにとられない自由で大胆な着想こそ、有田一壽の持ち味でした。「時には放心の時間をもたねばならない」「心や生活に余裕をもって経営者の方が、素晴らしい着想を得ることができる」といった言葉も残しており、これは進取の気性に富み、新たなチャレンジを大切にしている若松建設のカルチャーとして、確実に受け継がれています。

施工管理

「まず現場を見る」。施工管理として現場に配属された新入社員に私に対して、上司が繰り返し教えてくれたのはこの言葉でした。安全や工期、施工品質の管理を行うのが施工管理の使命。そのためには常に現場に足を運び、わずかな異常の芽がないか、察することが重要なのです。場数を踏めば踏むだけ経験が増えていき、現場を見る目も磨かれていきます。当時の上司の教えは、今も私の中にしっかりと根づいています。

現在私が担当しているのは、護岸の耐震補強工事です。多くの職人を束ね、重機の配置や入れ替えなども含めて、工事を予定通りに進めていく調整作業は、まるで複雑なパズルを解くような面白みを味わえます。一緒に汗を流す職人たちはベテランが多く、その豊富な経験には教えられることが多く、コミュニケーション



現場に目を配り、
人を束ね、
工事を進めていく。



PROFILE

安田 和弥

2014年入社 土木部建設工学科卒

社会に価値ある仕事を刻むことができた

入社してすぐに担当したのが、千葉の橋脚工事の現場でした。経験ゼロからスタートし、やっと一人で測量作業ができるようになったことなど、私にとって思い出深い現場です。妻と一緒に車でその橋を渡ったときに、そのことを伝えるととても喜んでくれました。誇らしい気持ちと社会に貢献できたという思いで、胸がいっぱいになりました。

技術研究

ゼネコンの研究部門の魅力とは、ユーザーが自分と同じ社員であるということとです。そのため現場と一体になって試行錯誤を重ねていくのです。

私はコンクリート構造物の担当として、自動化やICT、AIなども視野に入れつつ、現場の施工品質を高めるための研究に取り組んでいます。これまで、コンクリート締め固めの際に複数の型枠振動機を制御するシステムを開発。現場のユーザーの声を傾けながらシステムの品質を高め、現場での施工品質の向上に貢献できました。現場からは常に妥協を許さない厳しい意見が寄せられるのですが、その高いハードルを乗り越えていくことが研究者としての醍醐味です。また、施工支援として現場で発生したトラブルの解決にも取り組んでいます。これもユーザーと一体に取り組める面白



現場と
試行錯誤を重ね
技術開発に挑む。

PROFILE

小山 稔樹

2012年入社 工学部都市工学科卒

震災復旧でマリコンの真価を知る

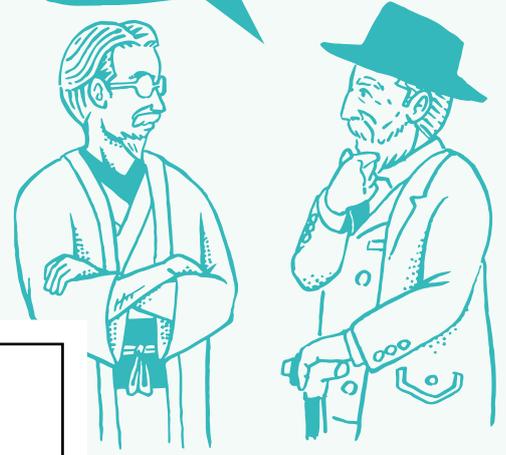
就職活動では巨大な構造物を扱う海洋土木に興味を抱くようになりました。そんな中で遭遇したのが、あの3.11東日本大震災でした。若築建設に入社後は、設計部にて東北地方の護岸や防波堤などの復旧業務に携わりました。島国である日本において海洋土木は非常に重要です。改めてマリコンの社会的存在意義の重さを実感することができました。



みがあります。

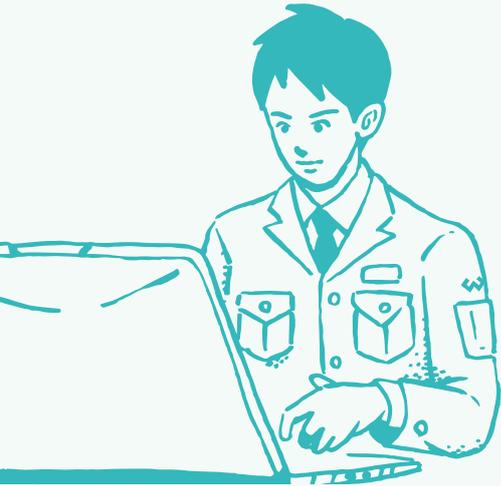
少数精鋭の技術研究所ですから、若手にもほとんど責任ある研究を任せてくれます。一人ひとりの影響力はかなり大きいですね。今後も研究者としての道を歩んでいき、施工現場の自動化・省力化に大きく貢献したいと考えています。

Baton to the future

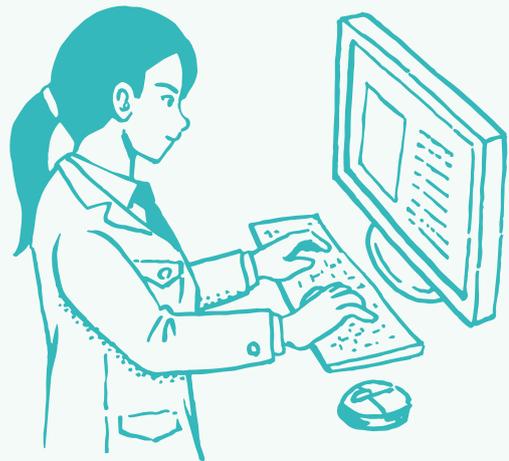


人	解説
物	若
史	築

The treasure of wakachikien



Power to combine forces



Take a look!



豊かな未来へ 技術のメッセージ

若築建設